

『希望を失わず』復刊にあたって

桜美林学園理事長・学園長 佐藤 東洋士

学校法人桜美林学園は、二〇二二年五月二八日に創立一〇〇年の佳節を迎えることとなりました。

その間、様々な行事や式典が準備されていますが、記念事業の一つとして、創立者の偉業を振り返り、「次の一〇〇年をいかに歩むべきか」をみんなで共有するために著作の中から何点かを選び、出版する運びとなりました。その一冊目として出版するのが、本書の『希望を失わず』（昭和二三年九月一日初版刊行）です。

初版が発行された際はページ数も少なく、冊子のような本でしたが、清水安三先生は本を持って、福島、茨城、栃木、群馬、埼玉、山梨、長野の各県を講演行脚され、講演の最後に本の広告をして、一冊ずつ買ってもらい二十数万円を得ました。先生はこれを旅費に渡米しようと計画していましたが、短期大学を開設するには理科実験室の整備が必要と文部省から指摘を受け、その費用に投じました。そして昭和二五年四月には無事に短期大学を開設されました。

短大開設後、再び近畿、四国の各地を講演して歩き、渡米の旅費を得て、昭和二六年三月に渡布（布哇^{ハワイ}）、半年間ホノルルに滞在し、精力的に講演会を行いました。続いて北米へ渡り、カリフォルニア、オレゴン、ワシントン、ユタ、ネブラスカ、コロラド、イリノイの各州を巡錫（各地をめぐり歩いて教えを広めること）されています。次にブラジルのサンパウロに渡り、二年にわたる講演旅行を終えられました。

帰国後、この間に各地でいただいた寄付金と本を販売した資金をもとに、老朽化や破損がひどかった校舎の修繕改築を行いました。その意味でもこの本は桜美林学園の基礎を築くことに大きく寄与したといえます。

清水先生は昭和二十一年三月一九日に中国から引き上げて来られましたが、北京を去る際のエピソードを以下のように記されています。（筆者要約）

郁子と二人で、崇貞学園の門を出ても、後ろを何度も振り返りながら立ち去った。

学園を出て一キロばかりの朝陽門外大街まで出ると、学園チャプレンの老牧師が追いかけて来た。何かと思ったら、

「これを先生にお贈りしますから、持って行って下さい」と言う。

ポケットの中から取り出したのは一冊の新約聖書だった。その聖書の扉には「遇顛沛不失望」と墨で鮮やかに書かれてあった。

日本の聖書には、「せん方盡くれども、希望を失わず」と訳してある聖句だ。

「顛沛（てんぱい）（つまり倒れること）にあつても、望みを失わずですよ」と牧師は幾度も繰り返しつつ私の肩を軽くたたいた。そして「再見」「再見再見」と言うや否や、駆ける様に学園へ帰って行った。

「為ん方尽くれども希望を失わず」は桜美林学園の精神とも言うべき聖句であることも、本書を一冊目として選定した理由の一つです。

この新装版の刊行にあたっては、東京都立大学名誉教授・南雲智先生、ナルド社・佐藤貢土さん、論創社ほか多くの方にご尽力いただきました。ここに記して感謝に代えさせていただきます。創立一〇〇周年をきっかけに、本書が桜美林学園の中学校・高等学校の生徒、大学の学生、皆さんの指針になればと願ってやみません。

二〇二〇年二月吉日

◎凡例

- 一、底本として清水安三著『希望を失わず』改訂第五版（昭和二六年八月一日発行）を採用した。
- 一、かな遣いは、送りがなも含めて現代かな遣いに改め、旧字・異体字も新字体に修正した。その際、底本の明らかな誤字・脱字は訂正した。
- 一、外国語・外来語は現在、通用するものに改め、難解な語句や読み間違いやすい語句にはふりがなをつけた。
- 一、踊り字（、ゝなど）はわかりやすい表記にし、接続詞などの表記が現在と異なる場合は修正した。句読点の位置なども現代的な使い方に変更した。
- 一、現代の読者にとって難解な部分には注釈を本文中に補った。
- 一、著者による事実誤認と思われる箇所はそのままとし、ただし可能な場合、注釈をつけた。
- 一、巻末に人名索引をつけた。
- 一、本文中には差別的との誤解を招きかねない語句もみられるが、著作の歴史的意義からそのままとした。

希望のぞみを失わず

われら四方より患難なやみを受くれども窮せず
為せん方せつくれども希望のぞみを失わず、せめら
れども棄てられず、倒たざるれども亡びびず
常にイエスの死を我らの身に負おう

(コリント後書 四の八一〇)

序

この『希望のぞみを失わず』の一篇をわたくしはなおも希望を失わずという心持ちでもって世に送り出す。表紙に掲げた画(口絵参照)は、ジョージ・フレデリック・ワッツの名画「希望」の模写である。ワッツは一八一七年〜一九〇四年の英国の画家であった。名画「希望」は眼は隠され、足は鎖で地に縛られた乙女が、たて琴に残るただ一筋の糸をかなでている。そして天上にはただ一つの星が、見えずとも輝いている。わたくしの目下の心持ちはこの乙女の心持ちである。

この原稿の成ったのは学園の桜が散り初めし頃だった。その頃から学園はせんぐりせんぐり(くりかえしくりかえしの方言)。試みがひっきり無く襲うて来た。わたくしといえど、もうヘトヘトにならざるを得ない。この頃のわたくしは真夜中ふと目覚めてしとね(寝るときに敷く敷物のこと)の上に端座し、神に祈り道の拓かれんことを学園のために祈ることしばしばである。

この頃、上海の雑誌『希望』が二冊届いた。一冊の表紙は焼け跡に老父と老母がしゃがんでいる。その間に息子と娘が勇ましく立っている画だった。今一冊の表紙は激浪にもて

あそばれている帆船の画である。戦災の焼跡に立つ中国の人々の姿が『希望』という雑誌の表紙になり、激浪にもてあそばれている帆船の姿が中国の『希望』という雑誌の表紙のカットになっているのを知ってわたくしは限りなく喜びを感じる。そして目下わたくしは学園の経営者として、上海の雑誌『希望』のカットが教えるところの希望と同じ希望を抱いていることを告白する。

どうか激浪に揉まれているわたくしのため読者諸君はお祈り下さい。

終りにワッツの名画を模写してくれし桜美林学園英文科学生・篠崎剛三君と、本書のために美しい文字で書名をお書き下さった山崎光子先生に厚くお礼申し上げます。

一九四八年秋 八月十五日

東京南多摩郡忠生村桜美林学園にて

清水安三

追白

この書物の印税、その他すべての利益を桜美林学園校舎整備の費用に献ぐ

目次

『希望を失わず』復刊にあたって……………	三
序……………	九
「朝陽門外」から……………	
中国に行く……………	一九
崇貞学園の創立……………	二一
富者のトラスティシップ……………	二二
死して中国に行く……………	二六
小泉郁子の参加……………	二八
朝鮮服を着て……………	三一
終戦まで……………	
老北京……………	三五
かえって恵まれた境遇……………	三八

人生の辻々に立つマリア様	四二
渡米の途上	四七
ハワイの舌禍、筆禍	五二
黄金の指輪二つ	五七
使命のある者は殺されず	五九
平和、平和のために	六二
妻はれいご、己れは軟禁	六五
終戦から引揚まで	
八月十五日	七七
「己が部屋」に祈る	八一
中国の好人党	八四
一応は帰国	九〇
北京の謠言	九六
残留歎願書	九八
学園の後始末	一〇四

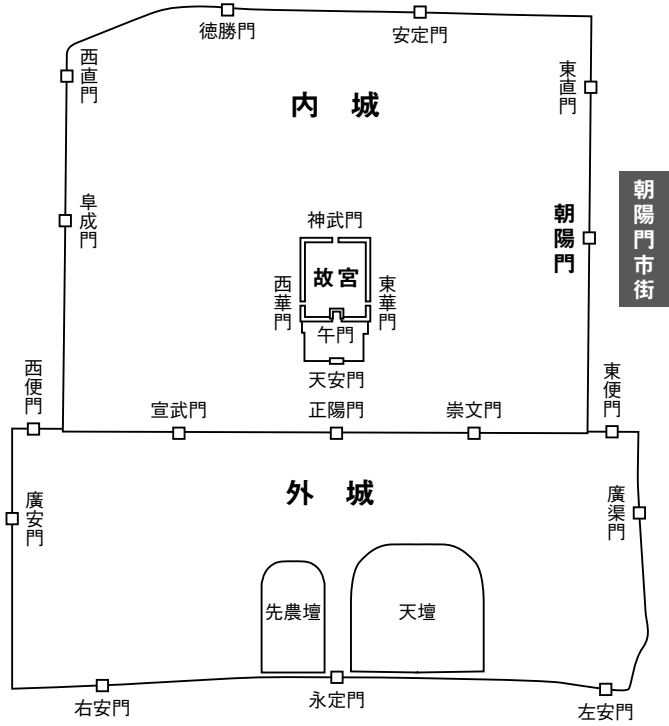
エホバ取り給う……………	一〇七
形見の遺留品……………	一一四
名を中国に残して帰る……………	一一九
一千年の後までも……………	一二四
永遠の残留者・美穂……………	一二七
マナの奇蹟……………	一三一
転宅また転宅……………	一三五
山上の説教を地で行く……………	一三九
影膳を供える……………	一四三
英語による奉仕……………	一四六
我なんじを捨て得ず……………	一四九
同胞へのラストサービス……………	一五二
張大人の饞別……………	一五五
命あつて帰れる喜び……………	一六三

桜美林物語

生くる望みを失う……………	一六九
ああ祖国日本……………	一七五
焼原に祈る……………	一八二
差し出されたる愛の手……………	一九〇
桜美林学園設立……………	一九八
すべては神の摂理……………	二〇四
応験……………	二〇九
必要は進歩の母……………	二一二
学園史の第一ページ……………	二一八
教職員集まる……………	二二三
六月六日の開校式……………	二二九
破天荒の認可……………	二三六
幼虫を食う……………	二四〇
白眼視、迫害の環境……………	二四五

きかれざりし祈祷	二四八
男女共学論	二五六
伝統的男女風俗	二六二
学園の特長	二七〇
教育革命を提唱	二七六
神の国とその義	二八三
引き揚げ後の崇貞学園	二八五
著者略歴	二八七

中華民國10年(1921年)
當時の北京城(内城・外城)



「朝陽門外」から

先年、朝日新聞社から拙著『朝陽門外』が、羽田書店から上泉秀信氏著『愛の建設』、それから隣友社から松本恵子氏著『大陸の聖女』が出版せられた。

これらの本はいずれも大同小異、同じことを別なる角度から見て、書いたものである。そしてその内容は、私や私の妻が、中国の貧しい人々のために建てた崇貞学園の物語を書いたものである。

これらの書物をお読み下さった人々は「敗戦後一体、かの崇貞学園はどうなったであろう。北京の聖者と呼ばれし清水安三氏は今も昔の如く、北京朝陽門外に頑張っというっしやるかしらあ」と心配して下さるであろう。

本著『希望を失わず』は、いわばこの三冊の本の続編みたいなものであるから、それらの人々には『朝陽門外』物語の後日ものがたりを読んで頂く前にもう一度記憶を呼び起してもらわねばならぬ。それからまた多くの読者の中には、これらの書物のどれも読まなかったといわれる人々もあるかも知れぬ。いずれにせよ私は『朝陽門外』の所々を抄記することから、筆を発足せねばなるまい。

中国に行く

私は二十六歳の時、中国へ行った⁽¹⁾。私は同志社大学の神学部の卒業を前にして、ある日級友とあい語らい奈良へピクニックに行った。その折、図らずも唐招提寺を訪れたところ、寺僧から鑑真和尚のことを聞いた。

鑑真和尚⁽²⁾は唐の名僧であったが、海を渡って日本に來り、この寺を建てたのであった。彼が船出ししようとすると、唐の皇帝は彼を惜しんで渡海を許さなかった。彼は脱走を試みて四度捕らえられ、五回目に脱走に成功して日本に來った。

ただひとり鑑真のみならず、日本歴史をひもとけば幾多の傑僧、碩学が日本に來って、日本の文化のために生涯を献げている。

私は、かれらに学んで、中国に渡ろうと決心したのであった。ひそかにかかる決心をしている折柄、私はホレス・ペトキン⁽³⁾の話聞いた。

ペトキンは保定^(現在の中国河北省にある都市)に駐住する宣教師であったが、団匪^(義和団の別称。排外運動の集団)が、保定に迫ったので、夫人と一子ジョンを伴って、天津の義勇艦隊へ避難した。

妻と子を艦に残して、艦橋を下ろうとした時に、米国総領事は「ペトキン君、保定に行つてはいけない。危険だ」と叱りつけるようにいった。しかし彼は、

「よき羊飼いは羊を棄てはしません」

といつて保定に帰つた。彼は保定へ帰つて間もなく団匪のために惨殺された。しかし、彼が彼の母校エール大学に宛てたる遺言状には、

「エールよ、エール。エールはどうか、我が子ジョンが二十五歳になるまで育ててくれ。そして彼が二十五歳になつたなら、どうか私の遺業をなすために保定へ来らしめよ」と認めてあつたそつな。

私はこの物語を聞いて、いよいよ決心を固め、大阪のクリスチャン実業家六名の支持を受けて、中国へ渡つたのであつた。

(1) 大正六年(一九一七年)五月三十日、神戸を出帆。一年間半、奉天(現在の中国遼寧省瀋陽)で中国語を勉強、大正八年三月北京に移つた。

(2) 鑑真和尚は種ヶ島に漂着、盲目になり、奈良に来られた時は、聖武天皇は東郊までお出迎え遊ばされた。弘法大師は孫弟子とでもいふべき人。

(3) ホレス・ペトキンの名を刻めるアーチが米国オベリン大学のキャンパスに建てられている。

(4) 私を支持してくれた大阪のクリスチャン実業家は、高木貞衛、吉田金太郎、船橋福松、荒木和一、大賀寿吉、青木庄藏の諸氏。

崇貞学園の創立

私は、今からあたかも三十年前(一九二二年のこと)に、北京の朝陽門(かつて明・清の時代、北京城東側にあった門の一つ)外に「崇貞学園」を創立した。

月十四円の家賃でもって民屋を借り受け、二十四名の少女を集めて、工読学校(1)を始めたのであったが、その学校は終戦の日まで続いた。

学校で、輸出ものの刺繍、アップリケを製作して海外に販路を広めたために、朝陽門外一帯は刺繍の産地となり、各家庭の女性は老婆から幼女に至るまで、皆刺繍を作って、男達はその糸を取りに行ったり、製品を届けたり、婦女の手伝いに追われるほどに流行した。そして一年に四百万円もの輸出が、朝陽門外から世界中に向かって送り出されるに至った。

このことが、日本の九重(皇居のあるところ)の奥にも聞こえて、御下賜金を携えたる使者が、わ

ざわざ東京から差し向けられたことすらあった。

(1) 工読学校というのは、Labour and Learning = アルバイト・シユール(工かつ)の(読書)こと。

(2) 四百万円の輸出というも今日の四百万円にあらずして、牛肉一斤が二十銭、鶏卵十個が五銭の頃の四百万円であるから大きい。

富者のトラスティシップ

学校を経営するには、大金がいる。どうして得たか。

最初の創立の費用は五百八十円であった。それは北支(支那北部の意味) 早災飢饉かんさいの折、開いた
災童収容所〔の残金であった。

一番最初に大金を寄付してくれた人は、神戸の実業家・田村新吉氏だった。田村氏は一面識もない二十八歳の白面の青年に五千円を与える前に、別室に退き、立ったまま祈って、「神よ、この青年に僕があなたから、預れる宝を渡すべきでありましょうか」と神様に問い、しかるのち小切手を書いて下さった。よく米国富豪のいう、トラスティシップ(信託

主義」とはかかる態度をいうのであろう。

次に、これまた五千円寄付されたのは、森村市左衛門（森村財團の創設者、六代目市左衛門）氏だった。私が

どうして、森村さんを狙ったかという、私の姉が、私の小学生のころ目白の女子大学

（日本女子大
学を指す）

に行っていた。姉の住む寄宿舎は「豊明寮」というのだった。私^が手紙を姉に

書くとき、いつも「豊明」とは変な名前だと思えてならなかったから、夏休に帰省した姉に、

「豊は豊臣秀吉、明は明智光秀かね」と問うと、

「そうじゃない。森村市左衛門さんには豊、明六、開作とお三人のお子さんがあったが、豊、明のお二人が若くしてお亡くなりになってから、財産を三分して、三分の二の財産から得たもうけは皆学校とか社会事業に寄付されるのでね、成瀬先生（成瀬）はその寄付で寄宿舎をお建てになったのですって」

そんなわけで少年の頃から森村市左衛門という名を覚えていた。大抵のお金持は靴の底が磨り減るまで通わせて、それから寄付したり、しなかつたりするものであるが、さすがに森村さんは一ぺんに寄付して下さった。森村翁もまたよきトラスティシップの実践者であった。

備前倉敷にも、トラスティシップの権現ごんげんのような一人の富豪があつた。大原孫三郎(大原財閥を築いた実業家。基督教の協会員でもあつた)氏は実に崇貞学園のドル箱であつた。ある人が私のことを悪くいったら大原さんはこういわれたそうなの。

「わたしは清水安三という人がいかなる人物であるかはよく知らない。けれどもここに一人の日本人が中国の貧しい人々のために生涯を献げるといふ以上、それを助けざるを得んではありませんか」

といわれたそうなの。

その外にも崇貞学園の恩人は沢山ある。初めの十五年間の月給を払われし大阪萬年社の高木貞衛氏、後の十五年間私の月給を払われし近江八幡のメンソレータム会社、校舎を建て下されし、わかもとの長屋欽彌(わかもと製薬の創業者)氏、檜崎武子夫人(3)、それからいつもお小遣いを下されし岩崎清七(磐城セメントを創業するなどした明治期を大補揺する実業家の一人)氏、その他約三千名、皆私を通して、神と中国の貧しい人々に財を献げられし人々である。

私は崇貞学園のために一万数千坪、大小二十二棟の校舎を建てたのであるが、寸土といへども購わずして得しこととはなく、一塊の煉瓦といへども値なくして得しものではなく、絶対に分捕つたり、占領したりせずして一大事業を成しえしは一重にこれ等の人々の義援

献金があつたればこそである。

ある人がいうに、米国ではなぜ共産主義が流行せぬか。それは米国の富豪が蓄積せし財をどしどし世の公益のために出すからである、と。我国の富豪はなかなか出さぬ。けれども暁の星の如くではあるが、我国にもトラスティシップの実行者はある。森村、大原氏等はその人々であつた。

(1) 大正(民国)八年(一九一九年)に、北支五省に旱魃と飢饉があつた。世界各国競つてその救済のため募金した。日本でも渋沢栄一氏が音頭取りで大々的に募金された。私はそのお金一万二千円を受けて、麦の収穫まで半年間災童を収容して、自ら災童収容所長となり、七百九十九名の少年少女を救つた。

(2) 成瀬仁蔵氏、日本女子大学校創立者。

(3) 労働代表として、ジュネーブに使わされし檜崎猪太郎氏未亡人。

◎著者略歴 (▼は社会情勢、周辺事項) 『石ころの生涯』(二〇〇九年三月二〇日改訂増補第五版)より作成

年号	年令	略歴
一八九一(明治二四)	〇	六月一日、滋賀県高島郡新儀村字北畑(現・新旭町)にて出生。
一九一〇(明治四三)	一八	四月、安井川尋常小学校、安曇川高等小学校、滋賀県立第二中学校(のち膳所中学校)を経て、同志社大学神学部に入學。
一九一五(大正四)		三月、同志社大学神学部本科卒業。卒業論文「トルストイの内面生活」。
一九一七(大正六)	二五	一二月、歩兵第九連隊に一年志願兵として入營。 五月、少尉任官、除隊。神戸出港、日本組合基督教会宣教師として中国へ。
一九一八(大正七)		六月、大連經由、奉天(現・瀋陽)到着。 横田美穂(二四歳)と大連教会にて結婚。

一九一九(大正八)

三月、北京に移住。大日本支邦語同学会に入学。

▼五四運動

五月、被災児童収容所設置(翌年五月、解散。一〇月、その功勞に対して中華民国大統領より受勳)。

一九二二(大正一〇)

二九

五月二八日、北京市朝陽門外にて「崇貞平民女子工讀学校」を設立(生徒数二四名で発足。二年後、学制改革に基づき私立小学校として政府に登録)。

一九二四(大正一三)

三三

七月、北京出發、大阪教会にて按手札を受け正牧師となる。

八月、妻と共に横浜出港、アメリカへ留学。

九月、オペリン大学神学部大学院に入学。

五月、オペリン大学卒業、B. D. 学位取得。帰国。

夏、『基督教世界』誌編集主任。

一九二八(昭和三)

▼南京事件

二月、同志社にて大学・予科・女子専門学校講師、中国政治思想史・東洋史・中国史・中国哲学史など担当。

【著者紹介】

清水安三（しみず やすぞう） 桜美林学園創立者

1891年、滋賀県生まれ。中学時代に牧師ヴォーリズと出会い、同志社大学神学部に進学。

1917年、キリスト教の伝道者として中国へ渡る。1921年、弱い立場にある少女のための実務教育機関・崇貞平民女子工読学校を朝陽門外に設立。当時、その教育姿勢が評価され、「北京の聖者」と称された。この間、米国オハイオ州オベリン大学に留学。

1939年、崇貞学園と改称。敗戦により北京政府に接収される。帰国後、後妻の清水郁子とともに東京郊外に学校法人桜美林学園を創立、「キリスト教精神に基づく国際人の育成」を建学の精神に掲げる。

学びて人に仕えることを意味する「学而事人」は、清水安三が終生大切にした言葉であり、同学園のモットーとなっている。1988年に逝去、享年96歳。

のぞみ 希望を失わず

2020年3月20日 初版第1刷発行

著 者 清水安三

発行所 桜美林大学出版会

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-1-12

発売所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

rel.03 (3264) 5254 fax.03 (3264) 5232 <http://ronso.co.jp>

振替口座 00160-1-155266

装 幀 奥定泰之

組 版 ポリセント株式会社

印刷・製本 中央精版印刷

©2020 Yasuzo Shimizu printed in Japan

ISBN978-4-8460-1911-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。